HAPPY MEDIA 春日井 地域みっちゃく生活情報誌®

月刊はる。

kasugai Free Magazine

Da Monde 春日井
だから、かすがい

私たちは春日井の魅力発信プロジェクトを応援します。

5
2018 MAY vol.63
総発行部数 113,400部
無料各戸配布数 111,000部
無料設置数 2,400部

巻頭特集

「見守ってくれてありがとう」ひとつのマークから広がる理解の輪

表紙にスマホをかざすと動画が見られる!

スマホをかざして動画!!

今すぐアプリをGET!

フリモAR

●ビューティ特集

ビューティプロがアドバイス お悩み解決します!

●お母さんに伝えたい、感謝の気持ち

HAPPY Mother's Day

地元の求人情報が満載! JIMOJOB ジモジョブ

巻頭特集

「見守ってくれてありがとう」ひとつのマークから広がる理解の輪

桃山会
ももやま会
代表 中村 優子（なかむら ゆうこ）さん

桃山会
発達障がいや知的障がいがある子がいる親の会

ももやま会
桃山会立ち上げメンバーがマークを作る目的で立ち上げた会

青い鳥がデザインされた「ありがとうマーク」。
春日井市に住む４人のお母さんたちが考案したこのマークは、全国紙やテレビに取り上げられ、各地で反響を呼んでいます。
今回のはるるでは、この「ありがとうマーク」が誕生した経緯、込められた想いについてお話を聞いてきました。

本人に代わって周囲に伝える「ありがとう」。

妊婦さんが付けるマタニティマークや、内部疾患がある人が利用するヘルプマークなど、外見からは伝わらない悩みを周囲に伝えて、本人も周囲の人も気持ち良く助け合うためマークが広まってきています。「ありがとうマーク」もそんな見た目からはわからない発達障がいや知的障がいがある子どもたちが利用するマークです。「障がいがある子どもたちは、自分の目の前で手をひらひらと動かしていたり、その場でクルクル回り続けたり、突然大きな声でしゃべるなどの行動をとることがあります。また、周囲の状況を理解する事ができず、不安な気持ちからパニックになってしまう時もあります。障がいのことを知らない人が、突然そのような状況を目撃すると驚いてしまうと思います。でも、これは子どもたちにとっては当たり前なのです。自分を落ち着かせるためだったり、重要な意味のある行動なんですね。ありがとうマークには、そういった子どもたちの特徴を周囲の人に知ってもらいたいという願いを込めています」と話してくれたのは、ありがとうマークを考案したももやま会代表の中村さんです。

マークの説明

○本人は「見守ってくれてありがとう」メッセージ入りのピンクのマークと、メッセージなしの黄色のマーク、好きな方を選んで身に付けています。

○保護者や支援者はメッセージなしの黄色のマークを身に付けています。

桃山会のご案内

「桃山会」では、未就園児～高校生までの発達障がいや知的障がいがある子どもがいる保護者が集まり、子育てや進学についての悩みなどを気軽に話せる会を開いています。

日時：毎月第２木曜日10:00～12:00
　　第４木曜日13:00～16:00
場所：総合福祉センター

取材・文／株式会社ジオコス 盛川幹人　カメラマン／ミゾグチジュン　デザイナー／魚住亮次

少しの行動から、理解の輪は全国へ。

ありがとうマークは、春日井市の障がいがある子どもたちを支援する「第一希望の家」で出会った保護者仲間で立ち上げた、桃山会での何気ない会話から生まれました。多くの保護者に共通していたのが「買い物や食事に出かけたときに、子どもたちの行動を周囲に説明できなくて困ってしまった」という悩み。そこで見た目ではわからない障がいを知ってもらう方法として、ありがとうマークのアイデアが浮かんだそうです。しかし、アイデアは出たものの、それを形にするという経験は誰にもありませんでした。そのため、なかなか話が進まないまま3年の月日が経っていました。

しかし、2016年に熊本で大地震が発生。そこで伝わってきたのは、障がいのある本人が、近所の人と一緒に避難できなかったり、避難所に馴染めないなどの問題が発生しているというニュースでした。「障がいの特徴を周囲が理解できれば、対策が取れるのに…」と感じた中村さんたちは、改めて3年越しのアイデアを形にするため、具体的な行動を開始しました。

マークのデザイナーとして白羽の矢を立てたのは、「第一希望の家」OBの秋本慎ノ介さん。小さな頃から絵に取り組んできた秋本さん。眉毛がチャームポイントの生き物の絵が評判になり絵本を出版するなど現在でも精力的に創作活動を続けています。そんな秋本さんがデザインしたのが「四つ葉のクローバーをくわえた幸せの青い鳥」でした。見守ってくれる人への感謝、そして幸せが訪れますようにという願いが込められています。

「試作品を作っていたころ、群馬県で同じような活動をされている『ハートバッチの会』の存在を知りました。そこで、かたちにするためのアドバイスをもらえないかと連絡してみたんです」と中村さん。すると、ちょうどその頃、ハートバッチの会は全国紙の取材を受けており、ももやま会の活動も紹介してくれたのだそうです。すると、全国からありがとうマーク購入の問い合わせが殺到。まだ、試作品の段階だったありがとうマークですが、多くの人に背中を押されて急ピッチで完成へ向けて動き出し、2017年7月にリリースされました。

その後も、地元新聞やテレビなどに取り上げられ、問い合わせは増え続けているそうです。現在は、春日丘高校のボランティア活動に取り組んでいる部活、インターアクトクラブもありがとうマークの普及のため、様々なイベントで販売の協力をしてくれています。

「ありがとうマーク」デザイン考案者 秋本慎ノ介さん

中学3年時には、岩手国体に少年の部で参加しました★

泳ぐこと、絵を書くことが大好きな慎ノ介は、春日台特別支援学校高等部の２年生です。"継続は力なり"をモットーに、水泳教室とアトリエ教室に10年以上にわたり通い続け、いまでは生活に欠かせない存在になっています。

●障がい者水泳ぴぃ～すスイミングクラブ　http://piisu-sc.hp4u.jp/
●アトリエ-ノア造形絵画教室　名古屋市北区味鋺2-524　☎ 052-903-0114

絵本も作りました！

ありがとうマークをきっかけに、見た目ではわからない障がいの理解を深めたい。

ありがとうマークをリリースして約半年が経ち、子どもたちや保護者に向けられる目が柔らかくなったという声も聞こえてきています。中村さんは「ありがとうマークが特に必要になるのは3～4歳くらいでしょうか。そのころは、自分の子どもに障がいがあるという現実を受け入れようと葛藤している保護者、そして本人にとっても、障がいの状況がつかめず大変な時期。そして、身体は成長しても障がいの特徴は大きく変わらないため、大人になってからも周囲に温かく見守ってもらえれば心強いと思います」と話してくれました。「ありがとうマーク」をきっかけに、見た目ではわからない発達障がいや知的障がいに対する理解が進めば、本人も、保護者も、周囲の見守る人にとっても安心が広がっていきそうですね。

ありがとうマーク購入方法

●メールでお問い合わせください
momoyama_kai@yahoo.co.jp

●ホームページ
http://www.jpnet.link/momoyama/

●中部大学春日丘高校インターアクトクラブのイベント販売日程
5月27日(日)
「和っか市」in 高蔵寺駅
6月9日(土)
「消費生活展」in 春日井市役所